多様性学べる親日国
留学や研修続々

マレーシアへ教育旅

子供の教育にマレーシアへGO!? 東京学芸大卒でグラビアアイドルとして活動していた優木まおみさんがこの夏、母子で教育移住したことは象徴的だが、日本からの留学、修学・研修旅行先として注目が高まっている。▽多民族・多宗教国家で多様性社会が学べる▽英語が共通語として普及▽滞在費が手頃▽親日的で穏やかな国民性…などが要因という。もともと、日本からのロングステイ希望の国・地域として15年連続1位（ロングステイ財団、昨年発表調査）の人気がある。改めて魅力を探ってみた。

マレー系（イスラム教）58%、中華系（仏教）23%、インド系（ヒンズー教）7%、その他先住民族（さまざまな宗教）で構成する国家。「固有のカルチャーをお互いに尊重し、融合もして、争わず平和に団結している。われわれ国民が自然に築いてきた精神と文化が近年、多様性という意味で注目されている」と、マレーシア政府観光局のシャリザ・アジズ日本局長。マレー系の寛容なイスラム教徒でスカーフをかぶるかどうかは自由。彼女は肩にかかる髪をなびかせている。政府は来年を「観光年」と定め、日本の学校旅行誘致にも力を入れる。

「カンポン（田舎）ステイといって、自然の中で伝統的な暮らしを体験・交流するプログラムがある。SDGs（持続可能な開発目標）教育の観点からも、問い合わせが増えています」

都内の明治大付属中野中学・高等学校では6月にマレーシアの研修旅行を実施した。「環境問題に対しても日本とは違う視点がある。ボルネオ島の熱帯林の村で地元の方々、高校生と交流。伝統的なタンパク源である昆虫を食べたり、踊ったり、全く違う価値観に触れて生徒たちがいきいきしていた」と引率した清水孝校長。従来の旅先は欧米先進国のみだったが今回初めてアジアを選び、研修後何人もが「マレーシアの人はみんな優しい」と答えた。「日本へのまなざしを敏感に感じたようです」

親日的な国で学ぶことへの安心感。この夏100歳で来日したマハティール元首相が、日本の近代化を手本とした「ルック・イースト政策」の影響も大きいようだ。

日本からの修学旅行だけでも新型コロナウイルス禍前の平成30年で193校に上り、現在調だ。統計はないが、子供の広がっているという。

IT企業役員の女性(35)は(14)を首都クアラルンプールさせた。「(元英国領で)英国起業家精神を学べるインタースクールがあり、周辺諸国や学費や生活費が安いことがた」。娘は日本では不登校だっ生向けのビジネスコンペに挑秀を受賞するなど探求心が強ら半月。同級生との写真やビ充実した便りにほっとしてい

◇

彫りの深い顔、浅い顔…立ちと衣装のダンサーが、そ族舞踊の動きを織り交ぜなわせて群舞している。「これ国です」とシャリザ局長。博のマレーシア館で披露され心をわしづかみにされた。

それぞれの宗教で忌避するゆえの、多様な美食文化も西圏で8月19日放送、読売テ番組「す・またん!」では、100人による海外パビリオン1位にも輝いた。

会場に行かなくても本場の る。東京・JR水道橋駅そば ル1階に4月開店した「マ コピティアム」では、コ で炊いたご飯と辛いおかず に乗せたナシレマッ（12 ーミーなエビだしの麺料理 00円）、屋台飯の定番ワン 100円）などがあり、郷 現地の老舗食品会社ブラ 展開するレストランで「創 ルトパウチ技術を日本から た。そこからの縁です」と 口に広がる多彩なうまみ レーシアか。

多民族のダンサーに囲まれる、マレーシア政府観光局のシャリザ・アジズ日本局長（中央）＝大阪市の大阪・関西万博会場

ナシレマッ、ラクサ、パイ生地風パンのロティチャナイなど料理も多様。バラの飲料や定番のミロも＝東京都千代田区の「マレーカンポン コピティアム」

近ごろ都に流行るもの